

森田草平

先生と私



先生と私



偉人の人格はそのよく人を惹き付ける牽引力にも表れる。多くの人はその人格を慕い、その中うちに自己を見出して、偉人の周囲に集まって来る。尤もつとも、これは全面の真理という訳ではない。世には狷介けんかい孤独で一生を終わつた偉人もあるから、これを以て直ちに凡ての偉人を律する訳には行かないが、偉人の一面には確かにそう云う素質のあることも普く人の知る所である。

先生が始めて創作に手を付けられた前後から、さまざま

まな人が先生の周囲に集まって来た。その頃先生の門に走った者の中には鈴木三重吉君がいた、小宮豊隆君がいた、かく云うわたくし私ももいた。これらの人々は皆先生の人となりを慕い、先生の中に自己を見出して、有頂天になつてその門しゅつにゆうに出入したものだ。中にも豊隆ほうりゆう子の如きは、先生の中うちに自己を見出したと云うよりも、先生によつて初めて自己を造られたと云つた方が可いかも知れない。つまり先生から生まれたような男である。三重吉は先生とは大分違っていた。一寸見ては、何処に先生と相通ずる所があるうとも思われない。それにも拘わらず、彼は

先生の持つておられる一面を極めて濃厚に代表していた。では、私自身は何うか。正直に云えば、私はどうも先生の中に自己を見出したとは云い切れない。先生の持つて居られた好いもの、先生の長所と云うようなものを私自身も持つていたとは云いたくも云われない。趣味も傾向も違っていた。どちらかと云えば、所謂門下生の間にあつても、私一人は異分子であつた。異分子を持つて遇せられていた。ただそんな異分子でも包括せられた所に、先生の偉大もあれば、私が先生から離れ得なかつた理由もある。

で、そんな風だから、木曜会の席上でも、最初の間私は多く沈黙を守っていた。三重吉や豊隆子が先生の宅うちを我が家のように振舞ってる間に、私一人は先生の側そばに小さくなって跪坐かしくまっていた。が、先生の前で黙っている代わりに、自宅へ帰って手紙を書く。一つは少しでも先生に認められたいと云う客気に駆ぶられたことは云う迄もないが、一つは此方から先生に打突ぶつか行って、小さな自己でも砥礪とれいしたいと云う欲望があつたからである。先生はそれに対して屹度懇切な返事をくれられたものだ。で、好い気になって、又手紙を書く。今度出た『書



簡集』について見ても、その頃は私が一番先生に向かつて議論を吹っ掛けたらしい返事を貰っているようだ。何だか故人に対して済まないような、同時に又有難い気がする。が、その間うちにはだんだん増長して、先生の前でも幼稚な気焰きえんを挙げるようになった。一方木曜会も、最初はただ来客の多い所から面会日を木曜の晩に定められたと云うに過ぎなかつたが、だんだん談話はなしが弾むようになって、一時私どもが先生の前で勝手な熱を吹く討論会の性質を帯おんで来た。

一体、先生は若い者を相手にいくらでも談話をする人

であつたが、容易く若い者に同じられるようなことはなかつた。場合によつては、私どもの云うことには事々に反対せられた。余りそれが烈しいので、「どうも先生は反対するためには反対せられるような傾向がある」と、抗議を申し込んだことがある。すると先生は「僕は決して反対するために反対すると云うような、つむじまが旋毛曲りでも、えこじ依怙地な人間でもない。ただ君等のような若い者と一緒になつて喋つていたら、どんな事になるかも知れないと思うから、わざと君等を牽制するような反対説を立てるんだ」と云われた。「じゃ、先生はヘーゲルのディアレ

クテイック・メソツドを実行しておられるんですね」と云ったら、先生はくすぐ擽くすぐつたいような顔をして、「おれはヘーゲルを知らない」と云われた。まったく生齧りの知ったか振りは擽くすぐつたいものに相違ない。が、先生の門下生に対する態度は矢っ張りディアレクチシヤンのそれであつた。中にも、私は先生の反対対当にかかつて、いつもこつぴどく遣られたものだ。先生の座談に長じておられたことは人も知る。ただ如何にその所謂反対対当を立てられることの素早いか、又その間に先生一流の機智を閃くかを例証するために、一つ二つ先生と私との間に起

こつた問答を掲げて置きたい。

ちようど

恰度、私がある事情のために二週間程先生の家<sup>に</sup>厄介になつていた当時のことであつた。ある日の夕方私は先生と一緒にのお湯へ這入<sup>はい</sup>つた。そのころ私は人生を無闇に長たらしい、耐え難いものに考<sup>こう</sup>えさせられていたから、卒然として先生に向かつて、「先生は死んでからも一度人間の世に生まれ返さして遣ると云われたら、甘んじて生まれ代わつていらつしやるか」と訊ねて見た。一つは二人とも生まれたままの裸<sup>はだか</sup>体だから、そんな妙な事を思い附いたものらしい。先生は突然この変<sup>へん</sup>挺<sup>てい</sup>来<sup>らい</sup>な質問を

受けて、不思議そうに私の顔を見ていられたが、やがて臍の辺りをじゃぶじゃぶ洗いながら、「僕はこの胃袋さえもつと健康に生み付けてくれたら、甘んじても一度この世へ出て来るね」と答えられた。私は啞然として云う所を知らなかった。又先生は有名な子福者である。そこから想い附いた訳でもないが、ある時私が何かの序ついでに「人間も子供を産まない間は自分の生命は自分のたなごころ掌に握っている。先祖のアミーバから伝わった、この何千年続いたか知れない、又今後何万年続くか知れない生命の流れでも、自分の意志一つでどうにでも断つことが出

来る。が、一度<sup>ひとたび</sup>これを子供に譲つたら、もう永久に自分の意志の支配権外にある。その子が又子を産み、孫を産んで、今後何万年続くか知れない。何万年続いた揚句、自分の子孫が世界の覆滅の日に逢うかも知れない。それでも自分は手を拱<sup>きよう</sup>して見ているほかない。思えば恐ろしいことである」と云つたら、先生は言下に「馬鹿を云っちゃいけない。そんな事を心配した日には、自分のひつた糞の行く末だつて気になる。あれがどう変化して、今後何万年つづくか知れないじゃないか」と答えて、並み居る面々の度肝を抜かれたことがある。この二つの例

は、別段私が小酷こつぴどく遣こられているといふ訳でもないが、  
それでも私の空想的な感傷主義センチメンタリズムに対して、わざわざ先  
生の現実主義リアリズムを強調されたものとも見られる。かくの如  
くして、私の先生から受けた影響は、私の持つてゐる僅  
かなものでも、それを助長し、ははぐみ育てて貰つたと  
云うよりは、ともすればあらぬ方かたへ逸それ勝ちな私の性情  
を、先生に依つて矯ため直なおされたと云つた方が可いい。少な  
くとも私には始終左様そ見えた。私が兎も角も人生と社会  
とを正當に理解し、曲がりなりにも世の中に立つて行か  
れるようになったのは、一重えに先生のお陰である。實際、

先生がなかつたら、私は今頃どうなっていたか分からない。  
い。

が、それは精神生活の上よりも、実生活について一層適切に云われるかも知れない。尤も実生活と云った処で物質上のことを意味するものではない。その方では私よりももつと先生に厄介を掛けた連中が幾らもある。では何か。ほかでもない、『煤煙』のことである。当時さまざまな反対があつたにも係わらず、あの作を朝日新聞の紙上に発表することが出来たのは、ひとえ偏に先生の疵蔭ひいんによると云わなければならぬ。その後私は先生の下もとに同



新聞の文芸欄でも働いた。私が全然事務の才を欠くにも係わらず、これも先生の庇蔭によって、同文芸欄は先生の修善寺の大患以後まで持続することが出来た。思うに、先生が始めて創作に筆を執られてから修善寺の大患までと云うもの、最も露骨に云うことを許されるならば、先生は奥さんの先生でもなければ、天下の漱石でもなかった。単に弟子どもの漱石であった。弟子どもの所有であった。少なくとも弟子どもはそのつもりでいた。こんな事を云ったら、先生の方では大いに異議があるかも知れない。「おれはおれだ。お前達のために生きていたんじ

やない」くらいは屹度云われるに違いない。が、先生の没後、それに乗じてと云う訳ではないが、あの当時先生を「弟子どもの先生」と宣言して、私は内に省みても毫も疚やましくないように思う。但しそれは大患迄である。大患以後の先生は、急に弟子どもの手を離れて、天下の漱石となられた。社会の所有に帰した、同時に又奥さんの手にも帰って行かれた。尤も、これは単に私どもの感じから云うばかりである。が、それ以後の先生については、私どもが一番よく知っているとは云われない。じゃ、誰が知ってるか。恐らく先生を知る者は先生一人であつた

かも知れない。それからずっと、私は比較的先生から離れた生活をしていた。そして、大正五年十二月九日、先生はとうとう最後の大患に罹って不歸の客とられた。が、病臥の一週間十一月十六日の夜、最後の木曜会にゆくりなくも参会して、一夕を先生せきの温容に接しながら、心ゆくばかりの清談に過ごしたのは、私にとって何物にも代え難い記念となった。先生はその夜を最後として再び訪客に接しられなかった。私はその夜のことを想う毎ごとに、再び先生を自己の所有にしたような気がする——尤も、私一人の感じに過ぎないけれど。

これを要するに、私は所謂門下生の中でも一番よく先生を知っていたとはいわれぬ、一番多く先生から可愛がられたとは猶更なおさら云われぬ。が、一番深く先生に迷惑を掛けたことだけは確かである。迷惑を掛けたと云うことは一向自慢にはならない。ただ左様そういう自覚を持った時、私は一番先生に接近するような気がする。この書はその意味で、私の中にある先生を永遠に記念するものである。





日本文学電子図書館

---

## 文章道と漱石先生

著 者：森田草平

制作者：宮澤一郎

出版社：春陽堂

大正8年11月20日 印刷

大正8年11月30日 発行

---

日本文学電子図書館